方まで描写した個所が非常にたくさんみられ、紙特有の用途までも決まっていた事が明らかであった。紙の質と色によって使い方がちがうこと、例えば、写経につかう紫紙、常に身につけていて、歌を書く畳紙、国内のものから外来の唐紙まで、種々さまざまの料紙が場面と人柄とに適して登場してくることは、源氏物語の優美さの一端をになうものであり、その時代の文化的な感覚と生活のにじみでる一つの資料となりえるものであった。料紙に文字を書く描写も大変多くみられ（その個所を抜き出してカードにしたら厚さ10センチ程もあったから、どのくらいだったのだろう）　どのような文字でどのような崩し方をして、墨つぎ・墨つきはどのようであったという書き方に対する描写は料紙同様に興味深い分析をすることができた。仮名の種類、崩し方の別、墨つぎと墨つきの別、これは、版本によって「墨つぎ」とかかれたり「墨つき」とかかれたりした個所もあって、筆に墨をつけ直す意か、墨の濃淡かは疑問であった所もあったように思う。「源氏物語における紙と書」とは文化的実証的卒論であり、今考えれば、人間と書との関係、紙との関係等もっと深く追求すべきであったろう。ただ、私の趣味が、つたない書道であったから、このように料紙と書との調和に美を感じることをもとにした平面的実証におわってしまったのである。未熟な論文ではありましたが、私にとっては、今でも続きを勉強してみたいと思わせる卒論でありました。今日は、この原稿を書かせていただきながら、久方ぶりに、国語国文への静かな懐しさを思いおこしております。

後になりましたが、今度、国文学科報をだされること、わたくし本当にうれしく、後々まですばらしい学報になりますよう祈っております。

△『十六夜日記』▽ ――地名の調査をめぐって――

第二回卒業　小池　雪子

今、大学生活を振り返り、果して私はどのような勉強をしたのかと考えますと、真先に、卒論のことを思い浮かべます。

三年、四年と伊藤先生のゼミに入り、春休みが終る頃、やっと〝日記文学〟それも女性の手になったものをと決め、阿仏尼の「十六夜日記」に挑戦することに決めました。しかし、それをどうように展開するか、また頭を悩ませてしまったのです。そこで、伊藤先生に、いい知恵を授けて頂くべく研究室に伺いました。その頃、私はハイキング同好会に籍をおいてあちこちを歩き回ることに興味を抱いておりました。先生は、そのことをご存じだったようで「あなたはハイキング同好会にいて、歩くことが好きなようだし、また慣れているから、阿仏尼の歩いたところを自分の足で確め阿仏尼の頃と現在とを比較してみてはどうだろう」ととってもすばらしいアイデアを出して下さいました。そして、「文学遺跡辞典」なるもので調べると、場所等も非常にわかりやすく出ていることも教えて頂き、早速辞典を片手に、日記の中に出てくる、地名を抜き出し、調べることから始めました。また、「十六夜日記」の中に出てくる場所に関し、だいたい同じ頃に書かれた「海道記」「東関紀行」等とも比較してみることにしました。一通り、京都から鎌倉までのチェックをし、他の参考書で調べたエピソード等も折り混ぜて実地検証の前の資料が整いました。ちょうど夏休みの始まる七月頃のことでした。

私は、阿仏尼のように、一人で京都から歩くわけにも参りませんでしたので、だいたいのポイントをつかみ、その近くまで電車で行き、そこから一部分だけを歩くことに致しました。それでも旧道に出るには、一時間に二本か、もっと間遠にしか出てないバスに乗って田舎道をガタガタ揺られながら行かなければいけない所がいくつもありました。しかし、旧道にはまだ所々に松並木が残っていて、そこでは、昔の旅人姿で歩いていても決して不釣合には感じられない、何とも言えない情緒がただよっていました。また、現在、公害で大問題になっている田子の浦にも行きました。田子の浦という所は富士山を眺めるのに最もよいとされており、万葉の時代から、数々の歌人に詠まれて来たところですので、私も当時期待して行ったのです。その頃は、まだ公害があまりうるさく言われていない時でしたが、その場所に立って驚いてしまいました。まるで水とは言えない鉛色のドロッとした、いわゆるヘドロです。阿仏尼が見たら、一体何と和歌に詠むでしょうか。

夏休から十月頃まで、ほとんど実際に見て歩きました。ある所は、知合の人に頼んでドライブをしながら、又京都には大文字焼の頃を狙って、夏休みを大いに、勉強に観光も兼ねて有効に過ごしました。ただ観光だけではなかなか気がひけて出かけられませんが、そこに卒論という一つの大きな隠蓑があるものですから、堂々と出歩きました。これには両親も一言の文句もつけられません。

一通り歩いてみて、現在は高速道路、新幹線等が出来、まるで比較にならないような変りようです。これから、十年、二十年先、私の歩いた所はまたどのように変って行くのでしょうか。十数年先、学生時代のときのように辞書とノートを片手に、カメラを肩にかけて、同じ所をもう一度是非歩いてみたいと思っております。必ずまた歩きます。

〈ヤマトタケル物語と古代豪族尾張氏〉

第二回卒業　田中　とみゑ

十二月に入ったら、清書をはじめなければいけませんと注意されていたのに、まだ下書きが終ってなかったのです。毎晩遅くまで参考書や辞書を繰ったりして……そのような毎日の中で浅草観音様の羽子板市がはじまりました。誘われて出かけて行く気になったのも、困った時の神頼み、その時お願いしたのは、きっと無事に卒業できますようにと祈ったのではないかしら。もう何年前になるでしょう。

テーマは『古事記』の倭建命伝説にとりました。タケル伝説の形成過程をその担い手を採ることにより、現在みる伝説の裏にうごめく生々しい古代の世界の片鱗でも汲取りたいと思ったのです。資料を多く史学方面から参考にした為か、畑違いのことに興味を持ち、その結果論文も史学的すぎてしまったようでした。国文科と云うもっとも自己をみつめ、テーマの中に自分というものを掘下げ、投影していける分野にありながら、結局、倭建命の詩情も古代人の息吹もわたしの心には入らなかった。それでいてわからず屋の空論を平気で書いてしまったのですから、恥ずかしながらです。あの頃の想い出。ゼロックスの匂い、国会図書館のひんやりとした空気に、真夏の古本屋街。